

〔施設紹介〕

高岡の森弘前藩歴史館の開館

鶴巻 秀樹

はじめに

平成三十年（二〇一八）四月一日「開かれる弘前藩の宝蔵」をキャッチフレーズに、岩木山麓に所在する高照神社に隣接して高岡の森弘前藩歴史館（以下「歴史館」とする）が開館した。弘前藩四代藩主津軽信政（一六四六―一七一〇）を祭神とする高照神社には、信政の遺品を始め津軽家や弘前藩に関わる宝物が数多く奉納され現代に伝わってきた。この資料群は地域の歴史文化を語る上で欠くことのできない歴史・美術工芸資料であり、これらを適正な環境のもと保存し、展示公開により広く活用することを目的に歴史館は新設されたものである。

筆者は、歴史館建設の最終段階に整備担当となり、開館後は展覧会開催や収蔵資料の保存管理など学芸業務を中心として管理運営に関わっている。新設館の整備そして開館という、学芸員としてもなかなか得難い貴重な経験をしたことを踏まえて、歴史館整備の経緯や展示概要と活動状況、そして歴史館の役割等について、PRを兼ねて紹介させていただくこととする。

一 施設整備の経緯

高照神社に寄進された奉納品を収蔵公開していた「高照神社宝物殿」が老朽化し、収蔵管理する環境面において支障を来していることから、弘前藩の貴重な資料群を保存し、展示公開する施設の新規整備が計画されたものである。高照神社の文化財の管理と展示公開を担う「高照神社文化財維持保存会後援会」による地道な保存活動が続けられたものの、収蔵施設の老朽化は如何ともしがたく、宝物の劣化は避けられない状況にあった。平成十八年（二〇〇六）の平成の大合併により弘前市が、旧岩木町・旧相馬村と新設合併に向けて策定された「新市建設計画」において、「津軽歴史文化資料館」の整備が事業として位置付けられた。

平成十九年十月に高照神社代表役員ほか六名連名で「津軽歴史文化資料館の早期建設について」弘前市長へ要望書が提出され、二十年の「弘前市総合計画」における合併戦略プロジェクトに事業が搭載された。事業開始の二十二年（二〇一〇）度には館の規模や設備などを検討する基礎調査が行われ、二十三年度に建築基本設計を行った。二十六年四月に高照神社と弘前市との間で資料の取り扱いについて合意がなされたことを受けて、同年度に建設用地を取得し、保安林や自然公園など関係法令等に係る諸手続き、建築及び展示の実施設計を行っている。高照神社馬場跡についても、地元町会からの要望を受けて保存整備を行うことが事業化され、資料館整備と並行して用地取得、埋蔵文化財調査、整備実施設計を経て、整備工事が進められた。二十七年度に資料館建設用地の立

木伐採、敷地造成工事などを行った上で、建築工事を着工した。約二か年の建築工事を経て二十九年十二月には建物が完成し、翌年二月に展示ケース等を含む内装工事も完了し、収蔵物の搬入が行われた。施設名称は公募により「高岡の森弘前藩歴史館」と決定し、事業開始から八年の歳月を経て平成三十年四月のオープンを迎えた。

建物の構造としては鉄筋コンクリート造・一部鉄骨造二階建、延床面積一六三六・五六㎡、うち展示室四二四㎡、収蔵室五二一・八〇㎡を要している。収蔵庫の面積をやや広めに確保したのは、弘前藩に関わる資料を収蔵する役割を長年負ってきた弘前市立弘前図書館と弘前市立博物館の収蔵の余地が狭小になってきていることによる。両館所蔵資料の整理やデジタル化などの状況も勘案して、将来的に資料の移管集約なども視野に入れて歴史館の収蔵スペースを確保した次第である。

二 展示概要と活動

津軽信政の遺品や歴代藩主が奉納した宝物、藩が経営した神社としての関連古文書類、また明治十年（一八七七）に初代藩主津軽為信（一五五〇―一六〇七）が合祀された際に津軽家や旧藩士たちより武具類をはじめ多くの品々が寄進され、今に伝わる高照神社の収蔵資料群が形成されている。これらを中核とする歴史館の収蔵資料に、市立博物館・図書館ほか地域に伝来してきた資料を加えて、江戸時代の津軽・弘前を主要テーマとした展示公開が行われる。

常設展では、地域の成り立ちに大きく関わる弘前藩津軽家や藩士たち

「津軽信政着用具足」を中心とした導入空間としての第一展示室

の旧蔵品を中心として展示するもので、津軽信政着用具足をシンボルに、津軽領や弘前城下の絵図、弘前藩の歴史年表や津軽家の系図、岩木山を中心とした地形模型などによって弘前藩の歴史像や地域像を紹介している。企画展は神社収蔵品を中心に、弘前藩に関わる歴史資料・美術工芸資料を展示し、江戸時代の弘前を理解できるよう企画し、概ね年四回の企画替えを行っている。開館初年度は「開館記念展」「高岡の森の美術展」「高岡の森の刀剣展」「高岡の森の絵図展」を開催し、令和元年度は「お殿様たちの暮らし」「日本刀の美」「津軽信政と高照神社」「江戸の旅と観光」を開催する。歴史館所蔵資料としての特徴の一つである多くの刀剣類を活かすため、また重要文化財刀剣の公開を期待されているため、今後毎年一回は刀剣に関わる企画展を開催することになると想定している。

資料保存の観点や御神宝としての性格により実物展示が困難なものはレプリカ展示としつつ、大部分は実物展示を基本としている。実物資料

が長大または数が多く全てを観覧に供することが困難なもの、大型絵図や十mを超える絵巻物、全五十四枚の大絵馬については、タッチパネル式のデジタル機器を利用しての展示を行っている。展示物が江戸時代を中心とする美術工芸資料や歴史資料と限られており、特に刀剣類の鑑賞の環境を考慮して展示室の壁面色は濃紺とした。暗色を背景に落ち着いた空間で一点一点の展示物に集中できるとの意見をいただくなど、概ね良好な観覧環境を提供できているものと考えている。

展示の他の活動としては、歴史館に併せて整備した高照神社馬場跡の活用として、イベントとしての神馬奉納と流鏑馬を実施してきた。他にも歴史館の利用促進を図るため、甲冑レプリカの着付け体験や抜刀道の演武、外部講師を招聘しての歴史館講座、ロビーを会場にミニコンサートなどを開催している。また、弘前市と日本美術刀剣保存協会青森県支部は刀剣の保存や普及啓発に係る協定を締結しており、令和元年八月には「刀剣保護プロジェクト」として、刀剣女子による展示刀剣の解説会や支部会員による相談会も開催している。また、同九月には古武術に関するフォーラムとして、解説会・講演会や全国から集結した各流派による演武会、市民向けワークショップなども歴史館を会場に開催される。

歴史館の役割は単に資料を収蔵し、展示公開することだけではない。イベントほか様々な教育普及の機会を捉えて、地域に伝わる無形の伝統文化を市民に伝える場として、地域文化伝導の拠点としての役割を果たしていきたいと考えている。

三 文化財保護と歴史館の役割

高岡の森弘前藩歴史館条例第二条に設置目的として「弘前藩を中心とした津軽の歴史、美術工芸等に関する資料の収集、保管、展示等を行う教育的配慮の下に市民の利用に供し、もって教育の振興及び文化の発展に寄与するため」とされている。これは、収集・保管・展示の対象を「津軽に関する歴史、美術工芸その他の資料」とする市立博物館に対して、「弘前藩を中心とした津軽の歴史、美術工芸等に関する資料」と限定しているものの、それ以外の文言は市立博物館とほぼ同様である。両館とも市が設置する人文系博物館であり設置目的は当然類似してはいるが、館名のとおり「弘前藩」を意識した活動を行うこととなっている。

歴史館の収蔵品の中核をなすのは高照神社所蔵の宝物である。その宝物の特徴としては、初代藩主為信が豊臣秀吉より拝領し津軽家に宝刀として伝来した太刀銘「友成作」と、神社祭神の津軽信政佩刀である太刀銘「真守」の二口が国指定重要文化財となっており、他にも県重宝十一口、市指定有形文化財二十口をはじめとする多くの刀剣類を所蔵していることである。昭和五十二年開館の市立博物館にも多くの刀剣類が所蔵されてきたが、刀剣を含む武器類の効率的な管理が望ましいことから多くが歴史館に集約され、二百四十口を超える刀剣を収蔵し管理している。

現在、弘前市内に所在する指定有形文化財（建造物を除く）は、国指定六件・県指定二十六件・市指定百十四件、そのうち歴史館収蔵の文化財は、国指定二件・県指定四件・市指定十七件を数える。中でも工芸品における刀剣類に限ると、国指定三件三口中二件二口、県指定五件十五口中二件十二口、市指定八件二十七口中二件二十一口を収蔵するという、市内に所在する文化財指定刀剣類の大部分を所蔵し管理することとなっ

た。

近年における文化財の盗難等被害の増加に伴い、平成二十六年より文化庁は国指定文化財（美術工芸品）の所在確認の現況を公表している。

直近の平成三十年度末の状況で調査対象の指定文化財のうち所在不明が一・四％あるとし、種別内訳として工芸品が最も多く、中でも刀剣が不明全体の約半数を占めている。以前、ある刀剣コレクターから「銃砲刀剣類登録証さえ附属していれば刀剣所持に不都合がないため、文化財としての所在・所有者変更も銃刀法上の所有者変更も届出の必要性を感じない」との言葉を聞いたことがある。そもそも刀剣類は比較的頻繁に愛好家の間で売買されることが多く、またコレクターの率直な意見に裏付けられるよう、その移動を把握することも困難な状況にあり、結果として所在不明になる傾向にあるのは否定できない事実であろう。

このような状況の中で、弘前や津軽地域の人文系資料を数多く所蔵し展示公開してきた市立博物館に加えて、主要な収蔵品として刀剣を数多く抱える歴史館が新設された。まずは適正な環境を整えられる収蔵展示設備を有したことが重要であり、今後は的確な取り扱いができる人材を育成し、確実な技術継承の場となることが求められる。更に、定期的に刀剣展を開催することは、地域の刀剣愛好家や所蔵者の協力のもと開催に向けての最新情報の把握が必須であり、また調査や展示により実物の現状を確認するといったことが可能となる。実物資料を良好な状態で後世に伝え、かつ情報を収集し整理保管する場として機能することは、刀剣を含む有形文化財の保護においても大きな役割を担うものと考えている。

おわりに

平成三十年四月にオープンし、一年間で約二万一千人の来館者を迎えた。また、弘前市の観光の中心となる弘前公園より約10kmの岩木山麓という観光客等の来館の困難な場に所在し、また通年開館してはいても冬季は豪雪に閉ざされるといった立地を考慮すると、旧宝物殿は夏季の四か月程度開館して二千人前後であったことに比べても、決して少なくないと考えている。

手前に歴史館・高照神社社殿群・馬場跡が並び、奥には高岡集落

弘前市が策定した「岩木山地域ブランド基本戦略」中の戦略プログラムとして「温泉と合わせて楽しむ観光資源の強化」が掲げられ、温泉と神社や歴史館との連携強化による地域振興が謳われている。開館初年度に多くの団体の来館があり、展示解説を二百三十回、三千八百九十九人に対して行ってきた。それ

らの団体の多くは岩木山麓を中心とした近隣の宿泊施設等の宿泊・日帰りパックの流れでの来館であり、歴史館の存在が地域振興の一助になっているものと認識している。また、歴史館開館間もなく神社門前の高岡集落内に古民家カフェもオープンし、当地域に新たな交流が生み出されている。

多くの来館者を迎えることを目的とすれば歴史館の立地は恵まれているとはいえない。しかし、隣接する高照神社は国内唯一の吉川神道に基づく貴重な歴史的建造物であり、信政の廟所や馬場跡は緑豊かな境内地空間に所在し、三百年経て現在も神社管理を担い続けている高岡集落など、ここでのしか味わうことのできない貴重な歴史体感の場である。このような得難い資産を活かしつつ、歴史館は弘前市の歴史と文化の理解を深める場として、加えて、地域の文化交流の拠点として活用され、岩木山地域を訪れる人を増やすことで、地域活性化の起点となるよう努める必要があると考えている。

※掲載写真は高岡の森弘前藩歴史館提供

〔高岡の森弘前藩歴史館〕

所在地 〒〇三六一一三四四

青森県弘前市大字高岡字獅子沢一二八―一二二

TEL 〇一七二―八三―三一一〇

ホームページ <http://www.city.hirosaki.aomori.jp/takaoka-rekishikan/>

(つるまき・ひでき 高岡の森弘前藩歴史館主幹兼運営係長兼学芸員)